

シンプルな部屋

yukikago

シンプルな部屋

私はその部屋を訪問した時、まず初めに驚いたのが、下駄箱がない事であった。玄関だということにそもそも靴を部屋の中に入れるという空間が、存在しないのである。私は仕方なく、部屋の外に靴を置いて、中に入った。

次に、この部屋には何もないという事が確認出来た。壁すらない。唯一ある玄関の扉にすら壁の一片もない。ただ玄関のフレームだけが玄関と接地されているだけで、扉の裏側にはまた空間しかないのである。まるでどこでもドアのようだな、と俗な事を考えてしまった。

とりあえず直進する事にした。玄関のみが唯一の手がかりであるので、私は、背後に玄関がある事を何度も確認しながら歩いた。玄関の存在を確認する、歩く、玄関の存在を確認する、歩く、玄関の存在を確認する、歩く.....それを何度か繰り返していると、足に何か当たった。

それはやかんであった。どこにでもある、お湯が沸騰すると音の鳴る、単純なやかん。それがぽつんと、何もないところに置かれている。

何故ここにやかんなのだろうか。水を入れる為の蛇口もない。ガスコンロや電気コンロも見当たらない。ただやかんだけが、ここに鎮座しているのである。

私はやかんを持って、また直進する事とした。私の視力では玄関が捉えられなくなる所にやかんを再配置し、それを目印とする事とした。

私はヘンゼルとグレーテルの世界にでも入ってしまったのだろうか。そんな心持ちで、また背後を振り返りながら、位置を確認しながら直進し続けた。

次に見つけたのはベッドである。やはりここにもぽつんと一つだけそこにあるのだ。質素で、飾りという概念が欠如した作りの木のベッドには、マットレスがなかった。

足が疲れたのでこのベッドに腰掛けた。一体どうやってこのベッドで眠るのだろうと考えたが、そこには特殊な体技でもあるのだろうと思って考えるのをやめた。多分このベッドもそのうち捨てられる。

さらに先に行くと.....コップが一つ、粉ミルクの缶が一つ、これは確か一昨年の旅行の時に買ったご当地土産.....の空箱.....空き箱か、珍しいな.....。そんな事を考えながら空き箱の再配置位置を考えていると、やっとその人に出会えた。

その人.....先輩はこの部屋の主である。あまりに物を捨てる事執着するあまりに悟りを開き、こうしてよく分からない広い部屋に、点々と物を床に置いてはこれを「シンプル」と称するよく分からない住人である。この人から言わせれば無限に広い空間があれば無限に物が置けるのだから、シンプルな部屋が実現できるよね！との事である。それはあくまで無限に物が置ける無限の空間がある事を前提とした話で、それがなければ有限のスペースしかない部屋に必要な最低限の物を置かなければならない。つまり、この人には物に執着がないわけである。シンプルな部屋を作りたいという事に執着があるわけで、それ以外の物事.....例えば、思い出深い相手からの思い出深い贈り物や、初めて吸った煙草のパッケージ.....そんなものは、捨ててしまうのである。

この人はこの世が有限の土地しかないから捨ててしまうのだと断言出来るだけの根性があった。

酷く歪んだ根性である事は、偏見多き私にも齟齬なく伝わった。なにせ、先輩は、そうやって何でもかんでも……友情や愛情、そういう人間を感じる、目に見えない「情」すらも捨ててしまう人だったので、残ったのが私のような凡百な人間のみだったのである。

私は冷静に携帯電話で外部との通信を試みようと考えた。しかし、ここには電波がないらしく、先輩はどうやら外部との通信すらも捨ててしまったようだった。いや、だから私がこのようにこの場に来たのである。

……私は先輩に問いたい事はいくつもあった。そこまで執拗に物を捨ててシンプルでいようとする行為はなんなのだ、と。私が見た空間には、少なくともお湯を沸かすだけの機材を確認出来なかった。熱量を出す機材は不要と見なして廃止したに違いない。水なぞ飲まなくとも大丈夫だと考えたのか、蛇口も撤去してしまったのだろう。

もちろん、この広い空間だ。もしかしたらそういう設備もあるのかもしれない。しかし私には何となくそれらが存在しない事が確信出来た。先輩らしいじゃないか。

この人は生死すら捨ててるらしく、私から見るとどうやら餓死してるように見えた。酷く肌は乾燥しており、何故か両腕の爪が2、3剥がれ、血が固まった後が見て取れた。死後何日たったのかは私には判断しかねるが、腐臭もなく干からびているところを見ると、だいぶ前に亡くなっている……というのは理解出来た。

先輩はうつ伏せになり、両手を頭の上に掲げて、何かを守るかのようにそれを隠しているかのように見えた。私は失礼をして、先輩の両手が隠すそれを拝見させてもらった。

それは地面に生えており、丸く、しかし先端は少し角張っていた。私にはそれが、蛇口に見えた。私は再び先輩に問いたくなった。何故蛇口だけ残したのかと。何故蛇口のハンドル部分を捨ててしまったのかと。これでは水は出ないではないか。何故そこまで物を捨てたがるのだ。何故蛇口だけ残してしまっただ。

私は溜息をつくしかなかった。元々交友の薄い……いや、先輩から言えば捨てたものだったのだろう。それがこうしてやってきたのだから、世の中捨てたものではないだろうに。

私は先輩の二の舞にはなるまいと思った。物は適度に持てば良いのだ。シンプルな部屋などありえないのだ。それは部屋だけがシンプルで、実は部屋の外に依存しないと何も出来ない部屋なのだ。

天井のない……あるいは見えない部屋を見上げながら、私は後戻りする事とした。もちろん先輩の二の舞に……道に迷って餓死、はしたくないので、見上げたのはほんの一瞬であった。